

平成29年2月8日  
(2017年)

## 平成27年度吹田市立博物館事業評価報告書

吹田市立博物館協議会  
委員長 一瀬 和夫

吹田市立博物館の平成27年度事業評価について吹田市立博物館協議会では平成28年5月20日および平成28年12月2日の協議会において慎重に審議した。以下に吹田市立博物館がめざす活動目標に沿って、その結果について報告する。

### 1 展示 総合評価点 7.38点

詳細は別表平成27年度事業評価点(1-①~②)を参照

#### (1) 常設展示

ふつう展示開発はワークショップ、モックアップ、通常展示、ハンズオン展示、特別な触る展示という流れとなる。この流れは博物館の本質的なものから自然に生まれてくる段階を経たものと考えられるが、最近増設された展示物は一足飛びの場当たりの的で分断された個別的な展示開発の感がぬぐいきれない。

博物館の立地場所は、鉄道の駅から離れていることが弱みだが、都市化の中で残された数少ない里山である紫金山公園に立地することは、逆に自然環境やこれまで企画展でとりあげてきた須恵器・瓦窯跡や大庄屋の建物、それらがもし出す文化など、地域を取り込んだ「エコ・ミュージアム」の中核として機能する展示も期待できる。

#### (2) 企画展示

企画展に関して中期計画を立案することは重要であり、ここ何年かの企画では吹田の地域に密着し、古代から現代まで多彩なテーマが展開される。大阪近隣の諸都市の博物館施設の中でも企画に対する姿勢が明確であり、それを実践していることが評価できる。

吹田は、千里ニュータウンや大阪万博など、地方や国内にとどまらないグローバルな歴史的な事項とも言えるテーマを抱えており、そうしたテーマを明確に発信していくことが、館の将来的発展に対しても重要である。

他機関との多様な連携は、北大阪ミュージアムネットの中核館である吹田市立博物館の特色として定着しているように思われるが、今後もさらに明確にそれを打ち出した企画展を推進してもらいたい。

#### ①春季特別展『生誕100年西村公朝展—ほとけの姿を求めて—』(4月25日~6月7日)

西村公朝関係の展示に関しては、美術院国宝修理所、東京藝術大学などとの連携で、日本美術史や文化財保存にも関連して、さらに多彩な展開を期待する。

## ②企画展示「さわって楽しむはくぶつかん in すいた」(6月13日～7月5日)

10年間の「さわる展示」を総括するようなシンポジウム・報告会があればよかった。これまでの「さわる展示」の成果が、常設展の刷新につながる事を期待したい。28年度以降の「さわる月間」「館蔵品展」の内容について、その存続議論も含めて全館的な取り組みとして、引き続き館内でご検討いただきたい。

## ③夏季展示『まもる自然・つくる環境—こんなのみつけたよ—』(7月18日～8月23日)

特別展などの開催は展示と同時に博物館が資料収集、情報をまとめる最大のチャンスでもある。この中において、夏季展示は地域の歴史博物館的な性格が強い吹田市立博物館としては位置づけの難しい企画でもある。取り扱える学芸員および収蔵環境面から、現実として自然についての資料収集は難しいだろう。しかし、周辺との関係構築という社会関係資本は蓄積できる。今回の特別展においてもボランティアをはじめ、周辺博物館や図書館、自然関連団体と多くの関係者の協力を得て特別展および関連イベントが実施された。その関係者に「すいはくに関わってよかった」という手応えが残ったか？またやりたいと思ってもらえること。そして博物館関係者の側にも手応えが残ったか。入館者数だけでは測れない大事な軸である。

また、展示の発生が活動の参加者から湧きあがったものでなく互いが独立したものになっている。「すいたの自然はっけんシート」の意識調査は良い試みだと思われるので、そうしたものを起点として十分に生かすことを期待したい。中学校へ「吹田の自然の成り立ちと関わり」といったような理科の教科書もほしい。

## ④秋季特別展『絵図っておもしろい—国絵図と村絵図—』(10月3日～11月29日)

見応えのある展示であった。もともと絵図は視覚的史料であり、くずし字を読むことができない一般市民もかなりの程度理解できるものであるとともに内容も充実しており、入館者・利用者の満足度も高かったようである。展示した絵図の種類・点数も多く、また、大型絵図の展示に見られるように、展示方法にもよく工夫が凝らされていた。

問題点としては、やや盛りだくさんで、全体のテーマが把握しにくかったことがあげられる。日本図—国絵図—村絵図と、一見、小縮尺図から大縮尺図へと展開する展示に見えるが、日本図と村絵図は性格が大いに異なる。摂津国絵図は、吹田地域の位置づけを示すために必要であるが、今回は村絵図に限定し、それぞれ目的・機能ごとに分類するという展示形式の方が、入館者・利用者にとっては理解しやすかったのではないかと思う。

他館では絵図や航空写真などの拡大写真の平置き露出展示の例などが増えてきている。絵図の細かい表現にまで入館者・利用者に直感的にナビできるような一層の工夫をお願いしたい。

## ⑤特別企画「むかしのくらしと学校」(12月8日～4月3日)

小学校3年生の学習内容との連携展示である「むかしのくらしと学校」では、教員との連携をとりながらカリキュラム等にも配慮されている点がとてもよい。さらに学校側の要望も受けて展示内容の改善を図られ、結果として小学校の全校がこの展示を活用していることは何より高く評価できる。広報活動や内容の充実により、リピーターが増加していることに事業効果が顕著に表れていると考える。さらに、

この見学の後に、学校で総合的な学習の時間の一環として、地域のお年寄りからむかしのくらしを学ぶという単元の設定もでき、オープンエンドの学習展開も期待できるものとする。

展示に写真が少ないというコメントがあるが、市民への写真資料の寄贈の呼びかけはできないのであろうか。こうした展示にインタープリターが必要なものではボランティアの意識的な養成に本腰を入れるべきであろう。むかしの範囲が広すぎるという来館者コメントについては丹念に実年代の表示をして、展示配列などを工夫したストーリーを持たせるべきである。

## 2 市民参画 総合評価点 7. 11点

詳細は別表平成27年度事業評価点(2-①~③)を参照

### (1) 市民ニーズの把握

よりよい企画と市民ニーズの反映のために、アンケートを積極的に役立てるには、どんな方法でニーズを取得すればよいのか、具体的に検討しなければこれ以上の進展は望めない。アンケート調査の内容、対象、場所の検討が必要と思われる。特に館外での調査の必要性が重要と思われる。対象についても小学生から高齢者までのバランスのとれた調査でありたい。

今後はアンケート以外に、より積極的に入館者・利用者の意見を聞く方法の開発や、市民の意見を積極的に聞く機会を設ける必要があると思われる。市民実行委員、市民団体、ボランティアなど、日ごろから積極的に関わっている市民との意見交換の場を設けてはどうか。企画と運営の一層の充実と市民ニーズを満たす「すいはく」ならではのあり方が見えてくるのではないかと期待する。

### (2) 市民との連携

市民参画による夏季展示が、市民実行委員によって企画、準備、運営されている。また、学芸員のほかに外部アドバイザーを配置し、その体制が確立されつつあることも評価したい。しかし、イベントの集客力は高いが、展示については伸び悩んでいる。展示を市民委員の自己満足に終わることなく、さらに充実させる必要がある。

そのためには、経験の積み重ねのみならず、日ごろの学習や研修も必要と思われる。また、実行委員会を単年度募集とするだけでは、企画期間が短すぎて、展示室を埋め尽くすために四苦八苦しているように見受けられる。そのため、より長い期間、実行委員として研修し、学びつつ、企画、実行する市民委員を育成する必要があるのではないだろうか。

市民団体との連携については、ほぼすべての企画に、求めに応じて多くの市民団体が参加し、企画内容を一層充実させたことを評価したい。市民団体の協力に報い、「すいはく」の連携の力を積極的にアピールするために、その参加を展示で表示し、かつ広報してはどうか。

また、PTA関係、特に成人教育分野との連携が考えられる。また、美術関係団体とは、共同事業として、例えば「大坂画壇と現代大阪(特に吹田)におけるその流れ」といったものを実施してはどうであろう。

### (3) ボランティア

ボランティアの活躍と研修の実施を評価したい。市民委員とボランティアとは活動内容を異にし、同

じ場で活動しているのに交流がない。それぞれが「すいはく」という場について、市民の居場所として大切に思い、さまざまな気づきを持つはずである。それぞれの人は大切なサポーターであると言える。交流と意見交換の場を持ち、それをまた、市民参画の契機として積極的に生かすべきである。

また、ボランティアに大学生が参画したことを評価したい。「すいはく」を学生の学びと実践の場として生かしていくためには、市内の高校、大学との連携強化を積極的に実施する必要がある。その方途をより積極的に模索していただきたい。また、多文化共生社会の足がかりとして、外国人の企画参画などを促すべきであるとする。

ボランティア活動についてはますます充実度が高まっていると思われる。今後は活動メンバーの層の厚さが問題となるであろう。また、マンネリ化に陥らぬよう、常に原点に立ち戻って考察することが肝要である。博物館事業の充実には企画はもちろんのことだが、ボランティアの活動内容の充実を負うところが大きい。そのためにも中味の濃いボランティアの研修は欠かすことはできない。計画的な研修の実施が望まれる。

### 3 地域学習の拠点と連携 総合評価点 6. 79点

詳細は別表平成27年度事業評価点(3-①~②)を参照

吹田地域は「ニュータウン」も再開発の時期に入り、また北大阪急行延伸や彩都などの開発も含め周辺の変化は急である。こうした中において、「この地域をどうするのか」合意形成を図るために、この地域がどういう足取りをたどってきたのか、どんな文化資源を持っているのか、どんな人がいるのか、見える形になっていることが大切である。こうした課題を前に博物館の役割は図書館や公民館などと並んでますます重要度を増している。吹田を知ることが吹田を変えていくこと、同時に吹田を守ることにつながる。

子ども、子どもを通して家庭、そして若い世代もシニア・高齢者にも大人に学習の機会を与える。これは社会教育施設に求められる役割でもある。博物館に求められるのは展示室の経営だけではなく、地域の文化的経営とも言える。

昨年度も触れたが、使命や目標の趣旨に照らし、中期目標の各項目の数字を追うだけでなく、よりよく地域学習の今日として機能するためには、何が求められどのように各事業を勧めていけばいいのか、業務の関連を再検討し、相乗効果を高めていく。評価はそのためのものであり、課題意識を持った成果開示が必要である。それは何よりも市民の博物館への理解と信頼につながるはずである。

#### (1) 地域学習の支援

「幅広い年齢層への催事の実施」に関しては、高年齢層にも配慮した春・秋季特別展の取り組み姿勢は、ふだん目にできない貴重な文化財に触れることができ、高齢者を満足させたことは大いに評価できる。引き続き高齢者を視野においた企画を継続していただきたい。「出前・依頼講座」については、開催回数、参加者数とも平成26年度に比べ減少したものの、講座内容に対する市民の聴講欲求は根強く、市民が気安く講師依頼でき、また気楽に学べる環境をこれからも継続工夫してほしい。

## (2) 連携

「連携事業」に関しては、旧西尾家・旧中西家住宅の美術品整理や地域の図書館・公民館との講座開催や見学会等に新たに共同参画し、意欲的に連携事業を展開している。また、北大阪ミュージアム・ネットワークにおいては、平成25年度より開始したミュージアムメッセも軌道に乗り、北大阪の文化資源発信に効果的な役割を果たす。歴史街道推進協議会との西国街道連携事業においては、地元歴史団体（吹田郷土史研究会）と共催で、毎年講演会と歴史ウォークを開催し、西国街道に関係する歴史的遺物。歴史的構造物等に対する興味を市民の間に呼び起こして多くの参加者を得ているなど、市民の生涯学習に役立てている。

## 4 情報発信 総合評価点 6.83点

詳細は別表平成27年度事業評価点（4-①～②）を参照

### (1) 広報の充実

ホームページについては、展示・行事・刊行物・お知らせ・館長ページなど、適宜更新が実施され、見やすさやわかりやすさに関しても修正が加えられるなど、1年をとおして努力と工夫がみられた。またSNS、ソーシャルメディアによる新たな広報として、吹田市公式フェイスブックによる展覧会やイベント情報の発信などがはじまったことは評価される。

### (2) 博物館活動の公開

博物館活動の公開については、『博物館だより』『博物館報』『ホームページ』において、事業報告・研究成果・事業評価が適切に公開され、その役割を十分に果たしている。

情報発信として、①情報を発信することで来館者を増やし、博物館の存在意義をあげる。②吹田市立博物館の所蔵する情報を発信し、市外からの来館者を増やす。③市教育現場への博物館の立場を確立するといった目的などがある。博物館の仕事の意義は何なのかによって情報の発信の仕方はさまざまに変わってくる。③に関してはすでに行動されており、効果もでている。

①、②については、若年層から壮年層、10代～30代への情報発信はパソコン、携帯、SNS（インスタグラム等）を用いたアプローチが欠かせない。40代以上になると雑誌等の情報収集が中心となる。例外もあるが、ヨーロッパの博物館には歴史的にすばらしいもの、紹介するものがたくさんある。日本のテレビでも放送され、見学してみたいと望み、旅行会社と企画を組むようなことなど、グローバルながらも吹田市立博物館の活動として考えられる。そうした新たな活動には何があるのか、何を紹介するのか、大きく現状から脱却し、変革していく必要があると感じる。

## 5 学校教育との連携 総合評価点 6.78点

詳細は別表平成27年度事業評価点（5-①～②）を参照

### (1) 利用の促進

小学校3年生のカリキュラム連携展示（むかしのくらしと学校）の継続・改善において参加・体験型のプログラムを取り入れたことは高く評価できる。今後の継続的な改善を期待したい。

また、「あかりの授業」の出前授業はとても好評であり、さらに希望校が増えるように、より一層の連携を望む。あらたに実施された「イノコ」のわらつと作りに関しても、校内でミニ水田づくりをしている小学校が10校程あるので、こちらも少しずつ参加校を増やしていければと期待する。

さらに、例えば紫金山公園の遺跡見学も兼ねて、「渡来人」についての学習や戦時中の暮らしについても教材化ができることから、他の事柄に関しても教材開発を試みられたい。

## (2) 学校教育への支援

小・中・高、各学校種との連携を進め、さらに各学校のニーズに沿って取り組もうとする姿勢は高く評価できる。小中学校教諭を対象にした吹田の史跡見学（歴史探訪）を実施されたことは、地域史を授業に導入するという観点からも、非常に高く評価できる。今回は、10年経験者研修の選択研修としての実施であったが、教育センターと調整しながら、例えば、初任者を対象に拡大するなど、より多くの教諭に機会を与えることはさらに有益なものとなると考える。

中学校との連携で、山田中学校との意見交換により「吹田の歴史にふれてみよう（山田中学校版）」の作成・全校配布を実施し、中学生の夏期休業における利用促進をはかられたのは注目できる。特に今後、中学校との連携を進めるに当たって、社会科教員に広く博物館を知ってもらい、生徒の利用を促進するために、「吹田市中学校教育研究会社会科部（学研社会科部）」に対する働きかけが有効と考える。同様に、教育センター共催の小中学校教員対象バスツアーも有効な取り組みであり、是非、継続実施を望む。

また、各中学校が取り組んでいる「職場体験学習」も体験した生徒や、中学校教員にとって非常に有用であるので、生徒にとって魅力ある職場であることをアピールするプログラムや発信方法の検討を期待したい。

高博連携として吹田高校での出前授業も高く評価できる。今年度のプログラムが生徒自らが学び、研究し、発表を行う「アクティブラーニング」の要素を取り入れた形態であったことは興味深い。是非、高校と連携し効果検証をした上で改善・継続を望む。

高校生インターンシップの取り組みは、市内全5校の府立高校を中心に周知・広報の工夫を期待したい。

以上、様々な取り組みが、児童・生徒にとって魅力的な博物館であり、わがまち吹田を愛する郷土愛を育ていけるよう、学校教育との連携の推進を望む。

## 6 資料の収集と保管

総合評価点 6. 18点

詳細は別表平成27年度事業評価点（6-①～③）を参照

### (1) 資料の収集

資料の収集については、収集方針に沿いながら重点収集資料では博覧会関係資料を中心に着実に資料収集が進められたと認められる。また特別展の開催をきっかけとして近世吹田村の絵図が寄託されるなど、地域の歴史に関する重要な資料の収集が着実に進められたことは評価できる。今後も継続させる必要がある。しかし、一方で、市内の旧家などに眠っている古文書類の積極的発掘という試みはなされていない。1970年代の『吹田市史』編纂をきっかけに多数の史料が発見されたが、未調査・未確認のもの

も多いはずである。これらの史料は、廃棄や散逸の危機にさらされており、早急に調査を行うとともに、収集・保存の手立てを講じる必要がある。新『吹田市史』編纂事業が行われていない現在、これらの業務を担えるのは吹田市立博物館のみであり、館としてはその責任を積極的に果たす義務がある。これらの業務は、地味で多大の労力を必要とする作業であるが、市域の歴史を明らかにし、展示に反映させる上でも、また、史料の廃棄・散逸を防ぐ上でもきわめて重要であり、是非主体的・積極的に進めて頂きたい。事業計画に、「未調査史料の調査・収集」を盛り込むべきである。

## (2) 収蔵資料の保管・管理

収蔵庫の増築については、西村公朝作品の受入のための保管場所の確保という位置づけで、収蔵庫の増設要求が実施計画レベルで承認を得たことは、これまでの努力が一步進展したものとして評価される。今後は予算確保に向けてさらなる検討が課題となる。

資料の虫菌害対策は、新規収集資料に対して年2回のくん蒸庫くん蒸が実施され、また3年に1度の収蔵庫くん蒸も実施されるなど、良好な収蔵環境が保たれていると認められる。

## (3) データベースとその公開

データベースの作成と公開については、新規収蔵資料の整理・登録は、おおむね進められているが、収蔵資料のデジタル化については進捗があまりみられず、今後の課題といえる。収蔵図書データベース化は進められてはいるが、新規収蔵数に対応できず、データベース化が追いついていない状況にある。データベースの公開は、博物館の情報発信として重要な柱になるものであり、博物館の将来像を見据えながらの検討が引き続き求められる。

## 7 調査研究 総合評価点 7. 36点

詳細は別表平成27年度事業評価点(7-①~②)を参照

展示や講座の準備過程で必要な調査・研究が行われ、その成果が特別展図録、『吹田市立博物館だより』、『吹田市立博物館館報』、歴史講座などに適切に反映されている点は評価できる。

館内の研究会である「学芸研究会」を新たに発足させ、3回の報告会を開いたことは評価できる。ただし、このような会は、発足当初は活発に活動するものの、間もなく活動が低調になることも多い。有意義な研究会であるので、定例化するなど、継続的な活動のための工夫が必要である。

北大阪ミュージアム・ネットワークの活動として、関西大学において連携展示を行ったことは評価できる。今後もこのような積極的な取り組みを期待したい。

## 8 施設の整備・維持管理 総合評価点 5. 49点

詳細は別表平成27年度事業評価点(8-①~③)を参照

アクセスについての課題は山積だが、博物館へのアクセス表示看板が増えたことは喜ばしい。今回最大の要因であるトンネルを越えると博物館ということを知らせる案内作成に迅速に対応された事は高く評価する。地域との交流もでき、これからの博物館の発展の力添えになることを期待する。

今年度のアンケートで吹田市民の特別展、特別企画展、実習展の来館のきっかけには公園掲示板が多

い。このことからすれば、住宅地に囲まれた吹田市立博物館なので、公園と住宅地の境になる道路に向けての掲示板、看板や垂れ幕など、常設展示や通常行事以外の告知にも効果を上げるのではないかと。

阪急バスへの働きかけとして佐井寺北から博物館前までの運行延伸、バス停表示として佐井寺北に(博物館口)と表記してもらおう。これにより博物館の存在もわかる。市民に博物館の存在をアピールする効果的方法のひとつだと思われる。

吹田サービスエリアから博物館への文化パス(小径)をぜひ作ってもらいたい。団体バスなどからの入館者がバスを通り、やがて博物館へと誘われる。花々と美しい樹林の中のバスを通り、芸術文化に触れ、帰りはその余韻を楽しんでバスを歩いていただき、バスに乗り込んでもらおう。花植えと管理、その他環境整備などのボランティア活動全開となる。

また、点字による館内案内図作成への取り組みなども評価する。今後の製作に関しても良い方向で進むことを希望する。

立地条件を積極的に活用して、地域全体を一つの「エコ・ミュージアム」と見なし、その中核館として機能するようなダイナミックな構想を推進するのはどうだろうか。吹田市の人口35万人は日本の都市の中で全国57位であり、本来は中核都市であってもおかしくない。人口規模や財政規模において同格の他都市の文化施設との比較も含め、都市の整備計画における位置づけや市民意識の涵養など、吹田市が描く将来像の中で博物館など文化施設をとらえ、その重要性の発信を館職員に委ねるだけでなく、市全体でのアピールを期待する。

## 9 社会貢献 総合評価点 8.04点

詳細は別表平成27年度事業評価点(9-①~②)を参照

博物館は社会の中で機能する一つの機関であり、本来の機能を果たすことがもっとも重要な社会貢献である。ただし、教育委員会の中で機能するだけでなく、紫金山周辺の地域社会の中であり、吹田市の経済界の中であり、北摂の博物館群、さらには歴史学、考古学、民俗学、美術というアカデミアの中で機能すること、という多面的な社会の中での貢献である。

わずかなスタッフの博物館ですべてのことができるわけではない。身の丈の社会貢献で十分と考える。ただし、博物館の活動がどのように社会に貢献しているのか、積極的に示すことは重要である。そこには学芸員の研究も含まれる。吹田からの発信を強めていただきたい。吹田市博の博物館実習、JICA研修、インターンシップ、学会研究会などは社会への貢献としての意義も大きい。その意義を市民に伝える工夫が必要である。

\*なお、活動目標ごとになされた総合評価点は学識経験者6名、学校教育関係者2名、社会教育関係者3名、市民公募委員2名からなる計13名の博物館協議会委員による事業計画ごとになされた10点満点の個別評価の平均点とした。